平成24年1月号　№ 423

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町198-3
電話 (043)485-1801

96歳の元気を支える便利棒 ―― 鈴木美子
あるNPO法人代表の歩いた道 ―― 大川義郎
耳の力を考える ―― 吉井　弘
自　慢 ―― 稲村　孝

新春に寄せて

佐倉市長　蕨　和雄

謹んで新年のお祝辞を申し上げます。

市民の皆様におかれましては、心豊かな新春をお迎えのことと衷心よりお慶び申し上げます。

情報誌『なかま』にご投稿されている皆様や、編集に携わっている方々のご努力に深く感謝を申し上げます。『なかま』が市民の「心の交流の場」を築いてくださると期待しております。

昨年の3月11日の東日本大震災は、佐倉市にも甚大な被害をもたらしました。建物の全壊35棟を含め、道路・橋など大きな被害を受けました。また福島県で被災され佐倉に避難をされてきた方々もいらっしゃいます。被災されました方々には、心からのお見舞いを申し上げます。佐倉市といたしましても、今後、起こりうる大震災にそなえ、その対策を十分に行ってまいりたいと考えております。

また、東京電力福島第一原子力発電所の事故を原因として発生した放射性物質の飛散は、市民の皆様方に多大の不安を与えております。このため、佐倉市は除染計画を策定し鋭意除染に努めております。

さて、今年の干支である「辰」は、動物にあてると「龍」でございます。龍は古来より霊獣としてあがめられてきました。我々印旛地域の住民にとっては、身近な恵みをもたらす霊獣として、古来からの言い伝えがございます。印旛沼にまつわる伝説に、干ばつ時に雨を降らした龍が三つ裂きにされたこと。乞食坊主が印旛沼の龍に命がけの雨乞いをしてついに成就。大雨が降った後、沼周辺の村民たちのお礼も断り、ひと月ほど沼周辺を流浪した後、行くえ知れずになった話。そのほかにも白井市にある薬王寺の「青龍伝説」など。佐倉市内にも「龍神の掛軸」の話があり、鹿島川には「竜神橋」と名づけられた橋がございます。

今年は、この災害から人を救う「龍」にあやかり、続く震災被害を乗り越え、より高い市民福祉を構築したいと考えます。

結びに、本年も皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

96歳の元気を支える便利棒

「今日はこれ、ゲット！」と便利棒を巧みに操って引き出しからハサミを取り出して見せる96歳のYさん。その笑顔のなんと得意げなこと。身の回りのことを自分でできることがこんなにも人を笑顔にするものか、と改めて感じる。

Yさんが「これなしでは夜も日も明けない」という便利棒とは、花壇につかう120㎝の青竹風の棒である。片側に滑り止めのゴム、もう一方に曲げた針金を取り付けたものだが、これがYさんにとって大ヒット商品となった。

私の勤める福祉施設にYさんが入居されたのは8年前。3人の息子さんを育て上げ、四季折々に俳句を詠み、毎朝新聞を隅々まで読むYさんだが、足が不自由なため這って移動する生活に、何かとストレスが溜りがちであった。そんな時に軽い気持ちで我が家にあるものを使って作り、届けたのが便利棒であった。

ところがそれ以降Yさんの生活が激変した。ベッドにいながらのカーテンの開け閉め、洗濯物干し、戸棚や引き出しからの物の出し入れなど、今まで人に頼っていたことができるようになったYさんは、まるで腕が一本増えたかのようである。訪問するたびに増え続ける「ゲット品」を披露し、引き出しから飴玉を取り出して勧めてくれる。不便を当たり前にしなかった事で広がった世界である。

年をとるということは、何かを少しずつ失っていくことではない。年齢を重ねたからこそ見えるものもある。足元の一木一草にも命を感じ、色鮮やかに見えるこの頃である。一歩先を行く先輩の姿に思いを馳せ、私にもどんな景色が広がってゆくのか、まだまだ楽しみである。

（生谷　鈴木美子）

あるＮＰＯ法人代表の歩いた道

昨年6月の初め、都内の総合病院に知人のお見舞いに出かけた。7階に上がるエレベーターの中でこの方との10年前の出会いが思い出された。１９９７年1月夜、この知人の次女（20歳）が自転車で帰宅中、自宅近くの交差点で29歳（男）の飲酒運転の車にはねられて帰らぬ人となった。加害者は、業務上過失致死罪等で50万円の罰金。娘の死が50万円に怒りを感じた。

娘さんの突然の死。失意の中でインターネットから飲酒運転の撲滅運動をしているアメリカのＭＡＤＤ（飲酒運転に抗議する人々の会）を知り、「日本にも設立したい」という思いで活動を続けた。１９９８年秋、ＭＡＤＤから活動認定書が交付され、４年後「ＭＡＤＤ　ＪＡＰＡＮ」を設立した。そして刑務所、高校、団体そして会社などで「飲酒運転の撲滅、飲酒運転は犯罪。命の大切さ。子どもの命を守る教育」を全身全霊で訴え続けた。知人は「時が人の《悲しみを癒す》というが、何年過ぎようが、悲嘆と痛みは消えない。命日、誕生日、季節の変り目等に新たな悲しみがくる」といつも語っていた。その後、国は刑法等の一部を改正し危険運転致死傷罪等を設け、飲酒運転の罰則強化が図られた。この方の寝食を忘れた活動が一つのきっかけになったことに間違いはない。知人のお見舞いをした翌日、67歳という若さで帰らぬ人となった。今、娘さんとともに「飲酒運転は犯罪、交通事故とは呼ばない。命の大切さを」をいつまでも叫び続けるでしょう。その人は、ＭＡＤＤ　ＪＡＰＡＮ　代表飯田和代さん。ありがとう。

（藤治台　大川義郎）

耳の力を考える

母が100歳になった。生活を理解しようとするが困難で、いま老親と高齢者の関係がきずけない。難聴である。一般に「耳が遠くなる人は長生きする」という。長く生きたから耳が遠くなったのである。

三重苦のヘレン・ケラーは「目が見えないのと耳が聞こえないのとどちらかを選べといわれたとき、即座に「目が見えない方を選ぶ」と答えたという。

耳の機能を失うと、会話が成立しない。目はメガネがある。耳には補聴器があるではないか。その補聴器はききたい会話ばかりでなく、台所の茶わんの音もドアの閉まる音も強く響いて、とても不愉快になるという訴えをよく聞く。

人の耳は自然に聞き流すことができるのだが、補聴器はだめである。人の関係は耳から始まり、目で関わりを確認する。

目は口ほどにものをいう。超高齢者は、俳句をつくることをすすめたい。身のまわりの自然に観察力を集中できる。天気、雲をよくみる。空を毎日しげしげと見ていますが、とても美しい。

人と生まれ、生きて誰でもが百年しか生きられない。この限りのある人生を楽しく生きたい。100歳の母とは筆談という方法を考案した。

母が何を望んでいるのか。高齢者の私にできることは何か。孤独である人は不幸である。昔の親子をやっている。母の心を見守るだけでなく、心の中の「内なる心」を筆談で楽しんでいる。

（臼井台　吉井　弘）

自　慢

現在我が家に同居している犬がいる。名前はジョニー。シベリアンハスキー犬で背丈70㌢、体重約30㌔、毛並みは白で両耳は黒、鼻筋に黒線が2本有り素晴らしくハンサムな雄犬である。

一般的な犬が出来る仕種でお手、座れ、其の他は完璧に出来る。珍しいのは屋外で座って待つ「待てはどうするの」とか「駄目、ゴー、バック、ユーターン、右、左、曲がる、牛乳、クーラー、おうち」などの言葉は80％位分かるようだ。

持ち前の吠えることはあまりない。他の犬が吠えついてくると対抗して大声で吠え返す。ミニ犬には興味ないようだ。外に出たい、中に入りたい、もっと食べたいなどの時は大声一声で求めてくる。

運動に連れて行くときは、その時刻に近づくと、優しい声で唸りながら部屋を歩き廻って我々を促す。少し速足で約1時間位のコースを歩くのだが、なにしろ力があるので引き綱をしっかり持っていないと大変だ。左側の歩道を行くがY字路でユーターンを指示しても「もっと先へ行きたい」と実行しないこともある。途中で知人に出合い立ち話をはじめると、終わるまで傍らに来て静かに待っている。「ジョニーちゃんはいい子だね」と褒められることがしばしば。帰り道も右だよ、左だよ、と声を掛けながら歩く。途中で他の犬と擦れ違うように見えると、それを避けるために自ら反対側の歩道に移動し、それが過ぎると元の歩道に戻って来る。何も声は掛けないのだが驚きの行動をとるので感心する。家に着いて牛乳が欲しいとキッチンで待っている。

我々を充分癒してくれる最高の犬ジョニー。

（大崎台　稲村　孝）

１月の黒板

★★★佐倉学講座「印旛沼の文化と自然」★★★

中央公民館では、下記のとおり印旛沼に関する講座を開催いたします。
皆様の参加をお待ちしております。

第１回	平成 24 年 1 月 28 日（土）	講師　ＮＰＯ法人水環境研究所 内容　印旛沼と人とのかかわり等
第２回	平成 24 年 2 月 4 日（土）	講師　ＮＰＯ法人水環境研究所 内容　印旛沼の植物と千葉県の湧水
第３回	平成 24 年 2 月 25 日（土）	講師　作家　高比良直美 内容　印旛沼と文学
第４回	平成 24 年 3 月 3 日（土）	講師　郷土史家　内田儀久 内容　印旛沼の龍伝説とその周辺

※連続４回の講座として募集します。

会場　　中央公民館　学習室３　　開催時間　　午前１０：００～正午
定員　　各講座９０名　　参加費　　無料
申し込み　　１月１０日から　中央公民館へ電話でお願いします。（先着順）
電話番号　　０４３－４８５－１８０１

さくら道

世相を一字で表す「今年の漢字」の揮毫でも知られる京都・清水寺の森清範貫主が筆をとった昨年の一字は、「絆」でした。「みんなが手をつないで心を一つにとの願いを込めた」と、その思いを話されておりました。

もう一つに「想定外」という言葉も昨年を象徴するキーワードのようになりました。

それにしても、東日本を襲った想定外の大規模な災害。言葉を失う被害の大きさと広がり、わたしたちが自問した答えの一つが、今まで当たり前になっていた家族、友人への「感謝の心」の絆ではなかったでしょうか。

今年も、わたしたちが出来る被災地への支援として、生産物の購入や訪問などを通しながら復興を願い、絆を大切にしていきたいものです。

（六角　学）

あとがき

昇り龍の年がやってきた。波乱万丈、高揚、ときめきの1年となる予感はありますが「健康1番なかま1番」で行きたいものです。

今年1年の計ならぬ神頼みは正月に有り。私は家近くの八幡神社で参拝して、七福神参りに行きます。浅草・上野・深川と有名な所はありますが佐倉も歴史があり見ごたえがあります。私のお気に入りは妙隆寺の浄行菩薩様で、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）を清めます。天気が良ければ富士山が見える寺崎城跡もすがすがしい。

箱根駅伝も見逃せませんね。今年も東洋大学柏原の山登り、ぶっちぎりに感涙して我叫ぶ。「山の神は、神の上に柏原を作った。柏原の前にも後にも柏原無しと。雷電の再来と」。

待ちどおしいのはオリンピック。金メダル獲得女子は7個男子は3個かな。選手よ己にかつ。アッパレ、日本晴れ。

（白石義孝）